

追 想 寸 片

未知の先輩森下さんの死は、偉大な淨瑠璃殉教者をボツカリ奪はれたやうな腹立しさと云ひやうもない寂しさを薙々と痛感させた。計らずも絶筆となつた「引窓と橋本」を再讀してその緻密な名評に敬惜の念を禁じ得ない。

不幸にして個人的には未見であつたが、其の文章を通じて感じる批評家としての氏の個性には、圓熟した清高さと豊かな含蓄が滋味深く脈動してゐたと思ふ。

換言すれば氏は人格的で、透徹した睿智を持つ綿密深緻な

批評家であつた。

しかも其れは尖鋭な理智の亂舞ではなく、その基底に熾烈な淨瑠璃愛を秘めた高度の情理性が貫流してゐた。

故人の名藝に通曉した氏が廣大な見聞と、洗練された心理把握によつて論及した、幾多の淨瑠璃批評は、啓發的な有意義性を持つと同時に、淨瑠璃の眞諦に味倒する的確な深鋭性があつた。

至魂、徹心、身を以つて全生涯を淨瑠璃道に精進された森下先輩の御冥福を靜かに祈りしたい。

(内田富太郎)

森下氏の追悼には同氏の批評文初め 一般の批評を語る人に讀ませる事

本誌同人 岡田 蝶 花 形

森下氏が逝つた。あの華々しき引窓と橋本の名評を最後として森下氏は逝つた。

さて同氏の追悼には何をしたらよいか、それはあらゆる努力をして同氏の書いたものを語る人に再認識させる事だ。さ

うだ、それより他にはない。かう思つてこんな長たらしい題をつけた。

森下氏は決して或る個人を攻撃する爲に書いてゐるのではない。それを同氏の文は頭から津大夫を悪く云ふ爲に書いて

ゐると云ふのは以つての外である。

又織大夫や源大夫や文字大夫が森下、武智氏から悪く云はれたからヒイキに對し申し譯ないと文樂座で大會のある事をなさん爲の雜誌屋におだてられて催したとかしないとか聞くが、若し眞なりとすれば悪いと云はれたのは必ず悪い所があるに違ひない。それが悪くないのなら書かれた同じ雜誌に悪くない點を堂々と書くべきで、若しその雜誌が載せない場合は他の雜誌へ載せるとかすればよいのだが大會を開くなど云ふ兒戲に到つては餘りに馬鹿々々しくて物が云へないが或は若し彼等が本氣で云ふのなら己が無智を世上に示すこと以外の何物でもないと思は確く信ずる。氣の毒な大夫である

夢の如く逝つた同人森下蟻洞氏

樋 口 吾 笑

とまれ批評家の書いたものを惡口ととつたり、甚だしいのはその雜誌が來たら見ないで商賣用の菓子袋や茶袋にするといふ事を一つの自慢に公衆の前で述べる菓子屋や茶屋のおちさんに到つてはそれこそこちらは敵はない、そんな連中にはどうかして子供と同じでなだめて我等の書くものを讀ませる必要がある。

森下氏はじめ吾々は悪いところは悪いと云ふ自信を以てゐるので、それを覆す爲には千萬人押し寄せると云へども吾は往かんの氣概がある。まして不買同盟そんなことにはちつとも驚くものではない。森下氏の追悼には尙一層同氏の遺志を押し立てゝ進みたいと思ふ以上を以つて追悼の言葉に代へる

大阪素義の名人高木蟻洞氏と先代樋口吾笑は淨瑠璃藝術の上に於ける親密な交際であつた。不肖吾笑は先代蟻洞氏の令息森下蟻洞氏と三十年來管鮑の契を結んで居ました。森下氏が時事新報の藝壇を預つて居る時代から、堀江、北陽、新町南の義大夫藝妓、文樂、近松の兩座より大阪素義各大會に至る迄、批評に關する交渉は頻繁を加へ眞聲會、南和會、鶯城

會、宇部會等の審査員となり（姫路と宇部は伊東柳平氏と共同責任）講評録發行の端緒を拓きたり、是れより先き審判機會社を起し自ら内外第一線に立ち躍進に躍進を重ね、本邦屈指の大會社となり成功を告げたるも、其の剛直なる性質と覇氣満々たる經營振りは遂に重役連と意見の疎隔を來し出て邦樂同好會を組織し其の清廉潔白なる性質は自然の天恵ありて